第4章 | 目指すべき都市像

01 都市づくりの目標

長期的な視点から都市づくりを進めていくため、社会経済の構造的な変化や、国内外において東京が果たすべき役割を踏まえ、都民・企業・行政をはじめとする幅広い関係者が、世代を超えて共有できる都市づくりの目標を示します。

平成29年(2017年)に策定した「都市づくりのグランドデザイン」では、2040年代に向けた東京の都市づくりの目標として「活力とゆとりのある高度成熟都市」を掲げました。

この目標が示す ―東京が世界から選ばれ、成熟の中からなお成長を生み出し続ける「活力」と、あらゆる人々が多様な暮らし方や働き方を選択でき、豊かさを実感できる「ゆとり」― は、人口減少社会を迎える中にあっても引き続き重要な価値です。

東京は、人・モノ・情報の高度な集積や利便性の高い都市基盤を背景に、日本の成長を牽引する活力を発揮してきました。2050年代に向けては、国内外との交流・連携をさらに深め、東京圏全体としての力を高めていくことが求められます。また、東京には、多様な自然環境や地形のもと、これまで築き上げてきた都市ストックや、日々の営みを通じて育まれてきた歴史・文化などが幾重にも重なり合い、地域ごとに豊かな個性が息づいています。こうした個性を磨き上げ、新たな価値を生み出すことは、国内外から人々を惹きつける力となるとともに、そこに暮らす人々の誇りや愛着を育みます。交流・連携による厚みと、まちの個性が生み出す深み。こうした東京の強みを生かし、2050年代に向けて更なる「活力」を生み出していきます。

一方、人々が都市に求めるものも変わりつつあります。コロナ禍を経て、身近な生活圏の充実、日常の中で緑や潤いを感じられる環境等への関心が高まるとともに、多様な暮らし方や働き方、自分らしく過ごせる時間やまちなかの余白を重視する価値観が広がっています。人を中心としたまちづくりにより、あらゆる場所で緑が感じられる環境を整え、誰もが安心して活動し、一人ひとりが豊かさを実感できる暮らしの質を高めていく。人々の多様な暮らしや活動を支え、2050年代の東京に更なる「ゆとり」を育んでいきます。

こうした認識の下、2050年代に向けた東京の都市づくりの目標を、改めて次のとおり掲げます。

活力とゆとりのある高度成熟都市
～世界一の未来の東京を創ろう～

この都市づくりの目標は、国際競争力、自由な移動、安全・安心、エネルギー・環境、多様な暮らし、緑と水、文化といった様々なテーマの目指す姿が重なりあうことで実現します。

＜都市づくりの目標を形づくるテーマごとの将来イメージ＞

- 国際競争力で日本を牽引している
- 誰もが自由に移動できる
- 災害に強く、安心して暮らせる
- 次世代のエネルギー・環境モデルを構築している
- 多様な暮らしを選択できる
- あらゆる場所で緑と水を感じられる
- 東京ならではの文化が息づいている

02 2050年代の東京を支える都市構造

(1) 都市構造の基本的な考え方

「活力とゆとりのある高度成熟都市」を基本理念とした、2050年代の東京が目指す都市づくりの目標の実現を空間的に支える都市構造の考え方を示します。

1) 広域と地域の二層で捉える都市構造

少子高齢・人口減少社会の本格化、価値観の多様化、気候変動の進行などの大きな社会変化を見据え、広域的なレベルと地域的なレベルの二層の都市構造を示すことにより、都市活力の維持・向上と快適でゆとりのある都市生活を両立していきます。

広域的なレベルの都市構造では、これまで整備されてきた道路・鉄道ネットワークを基盤に、東京圏を越えた多様な地域との交流を一層促進し、それぞれの地域の強みを生かしながら、人・モノ・情報の循環を通じて活力を高めていくことが重要になります。

地域的なレベルの都市構造では、都市経営コストの効率化を図りながら、生活サービスや都市機能が適切に配置された地域構造の下、それぞれの地域が持つ個性を引き出し、快適な都市生活や活発な都市活動を支える地域構造へと再編していくことが重要となります。

2) 都心、副都心の考え方から脱却し、拠点の個性を重視

今後の成熟期において、東京が一段と質の高い成長を遂げていくには、成長期における「業務機能を重視した受け皿の育成」の視点から脱却し、「地域の個性やポテンシャルを最大限発揮し、各地域が競い合いながら新たな価値を創造」していくことが重要です。

こうした考えの下、地域の個性やポテンシャルを生かした拠点等の育成を進めるとともに、拠点間の結びつきによる相乗効果を発揮し、東京ならではの魅力強化とその発信力を高めていくことが求められます。

（2）広域的なレベルの都市構造

1）「交流・連携・挑戦の都市構造」の深化

東京は、日本経済の持続的成長と全国への活力の循環を支える役割を担っています。

この役割を果たすためには、政治、経済、文化など様々な機能の高度な集積を生かし、多様なサービスや産業から生まれる活力をさらに高めるとともに、国内外の人・モノ・情報の自由自在な移動と交流が確保されていることが不可欠です。このことが、イノベーションの源泉となる「挑戦の場」の創出にもつながります。

このため、都はこれまで、都県境を越えた環状方向と放射方向の道路・鉄道ネットワークの整備・充実を進め、都市や地域が網の目のネットワークで結ばれた「交流・連携・挑戦の都市構造」の実現を目指してきました。

この都市構造の下で、人・モノ・情報の交流を通じて地域間の連携が広がり、多様な主体による新たな価値の創出に向けた挑戦が生まれています。

今後も、空港・港湾機能の強化や、環状方向に加え、放射方向のネットワークの充実を着実に進めていきます。これにより、東京圏はもとより、北関東・中部・東海方面をはじめとする各地域において、空港、研究開発拠点、広域交流拠点、自然環境資源など、それぞれの強みを有する地域とのつながりを一層強めていきます。

こうしたつながりを通じて、首都圏を越えて各地域の機能が相互に結びつく「グレーター東京圏」の考え方の下、各地域の強みを生かした相乗効果を発揮しながら、農業、産業、エネルギー、観光、防災など多様な分野における連携を促進し、新たな価値の創出や挑戦を支えていきます。

2）広域的な都市構造の構成要素

① 骨格的な都市基盤

世界や日本各地とのアクセスと東京圏の広域的な人・モノの交流を支えるインフラに加えて、面的な広がりを持つ水と緑を「骨格的な都市基盤」として位置付けます。高速道路、骨格幹線道路、新幹線、都市鉄道、空港、港湾などのインフラや、山地、丘陵、崖線、河川、海岸などの自然地形、まとまりのある農地、大規模な公園・緑地などがこれに当たります。

②広域拠点

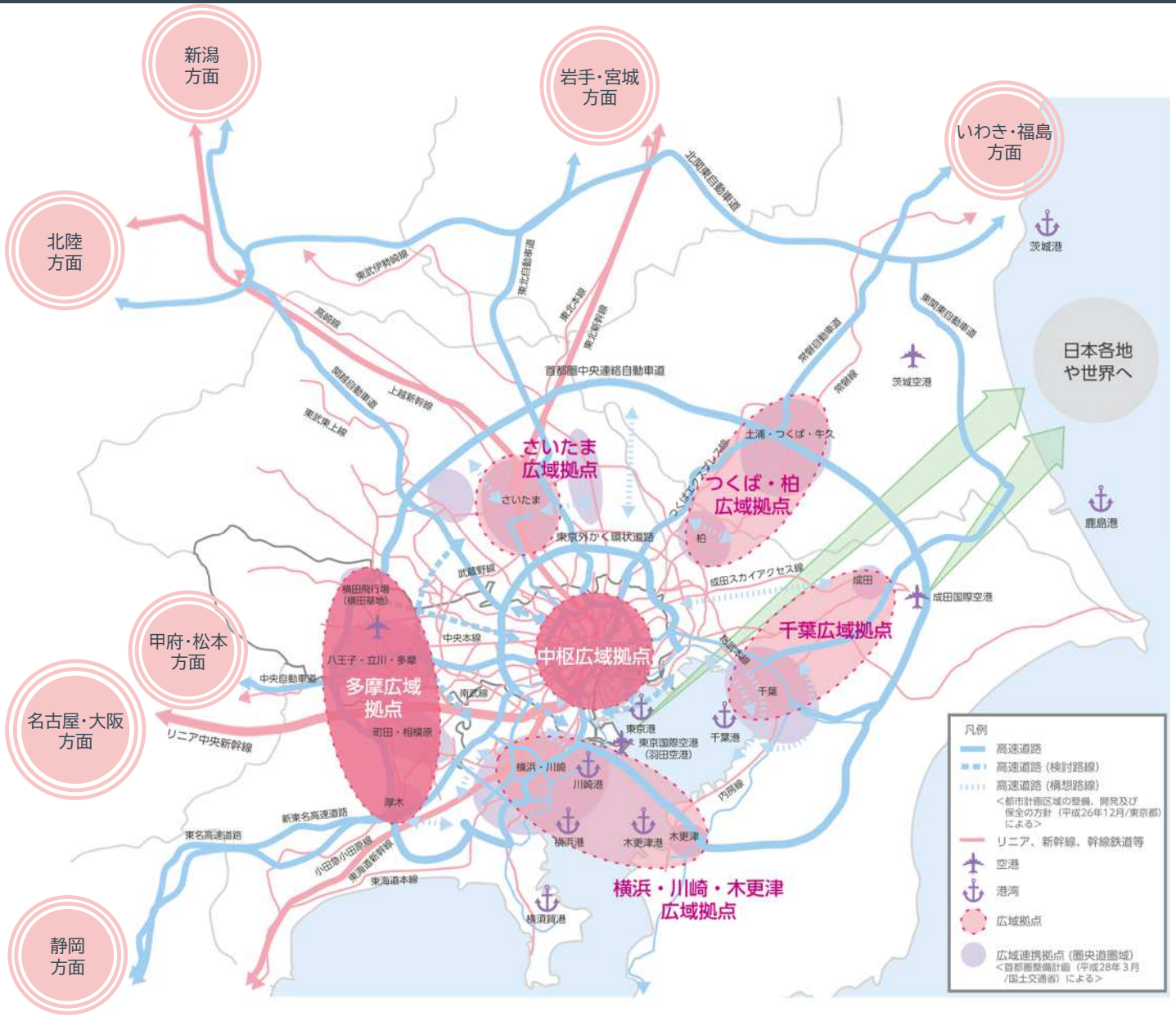
人・モノ・情報が高度に集積し、「グレーター東京圏」の広域連携や国内外との交流を牽引する要を「広域拠点」として位置付けます。

広域拠点	
中枢広域拠点	高密な鉄道網等の都市基盤が充実した区部中心部に設定し、日本の中枢機能を支えるとともに、「グレーター東京圏」における広域連携のハブとして機能する広域拠点
多摩広域拠点	道路・交通ネットワークの整備により広域的な産業連携や交流が可能となる多摩地域に設定し、多摩地域の核として機能するとともに、広域連携の中継地として機能する広域拠点

東京圏全体では、上記2拠点と、さいたま広域拠点、つくば・柏広域拠点、千葉広域拠点及び横浜・川崎・木更津広域拠点を加えた6つの広域拠点をイメージしています。

さらに、広域拠点を基盤として、北関東・中部・東海方面をはじめとする各地域との結びつきを強化し、首都圏を越えた「グレーター東京圏」全体の広域的な連携を一層促進していきます。

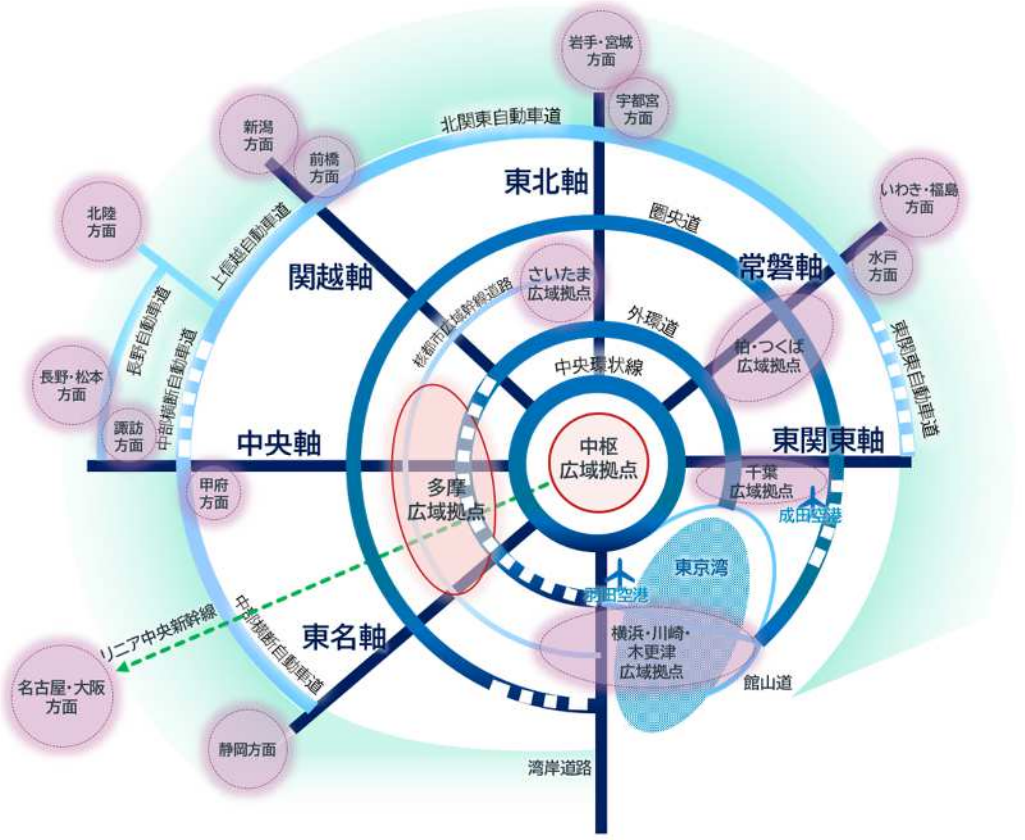
交流・連携・挑戦の都市構造
～グレーター東京圏～



（参考） 都市構造を活用した広域的な連携のイメージ

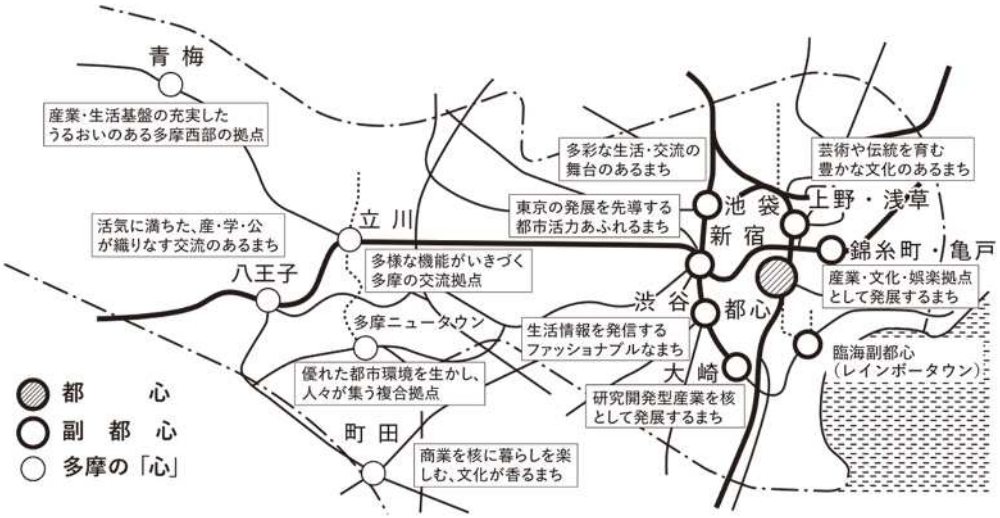
	東京		各地域		
農業	感度の高い市場 物流拠点	×	地域ごとの特産物	→	食料の安定供給に寄与 輸出の拡大、農地保全、 農家の持続可能性を向上
産業	起業・成長の場	×	研究開発の フィールド	→	各地域の研究施設と都心 を繋ぎ商談がより迅速に
エネルギー	グリーン電力の 利用促進	×	再エネ・新エネの ポテンシャル	→	電力需要増をカバー
観光	エントリー観光地	×	隠れた観光地	→	江戸文化から各地域の文 化、自然環境までホッピン グツーリズムを誘引
防災	広域防災拠点 官民の避難施設	×	災害対応基地 避難所となる公共施設	→	広域災害に強い都市圏に 発展

グレーター東京圏の概念図

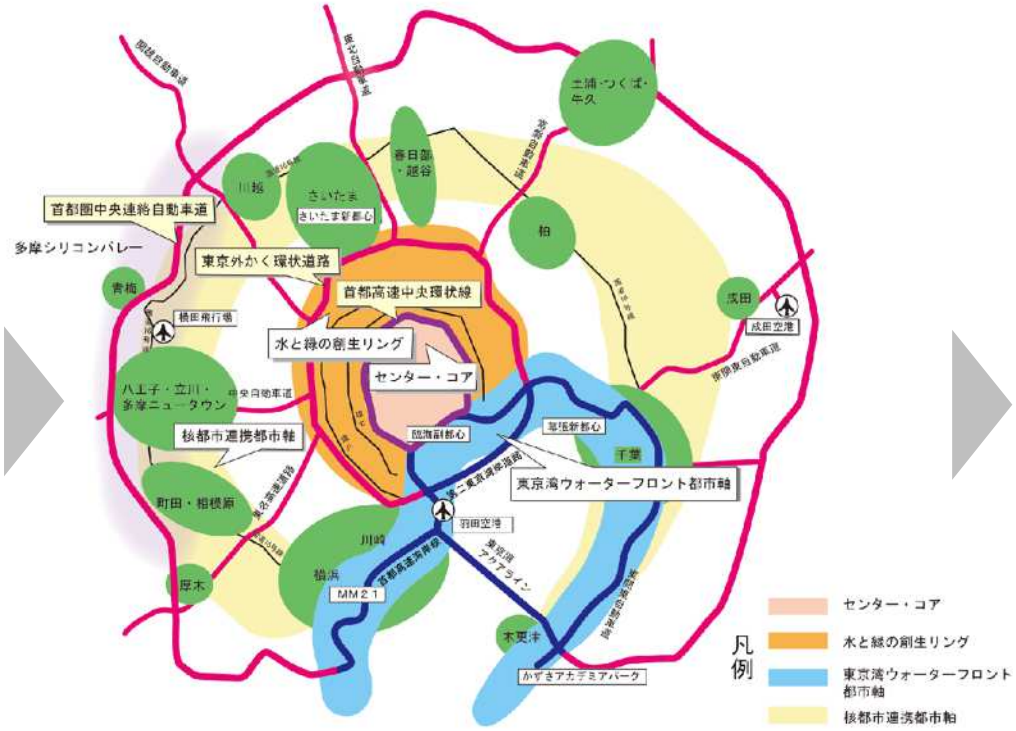


（参考） 東京の都市づくりの変遷

多心型都市構造（1982年～）



環状メガロポリス構造（2000年～）



交流・連携・挑戦の都市構造（2017年～）

- 都心一点集中型の都市構造の是正
- 業務機能を副都心や多摩の「心」へ分散
- 職と住のバランスがとれた多心型都市構造へ再編

- 東京圏域全体で首都機能を担う多機能集約型の都市構造の構築
- 環状方向の広域交通基盤を強化
- 需要対応型から政策誘導型の都市づくりへ転換

（3）地域的なレベルの都市構造

1）集約型の地域構造への再編の加速と深化

今後、少子高齢化や人口減少が進行する中でも、都市経営コストの効率化を図りつつ、持続可能で誰もが活動しやすく快適に暮らせる地域を実現することが必要です。

このため、都はこれまで、主要な駅周辺や身近な中心地に生活に必要な機能を集積させ、その徒歩圏に住宅市街地を誘導することで、歩いて暮らせるまちへの再構築を図るとともに、駅や中心地から離れた地域では、緑豊かな良質な環境を形成するなど、「集約型の地域構造」への再編を進めてきました。

2050年代を見据えると、都内の多くの区市町村で人口減少が本格化するだけでなく、現在人口が増加している地域であっても、急速な高齢化や単身世帯の増加が確実に進行します。これらの人口動態や社会構造の変化は、空き家や空き地などの低未利用空間への対応、既存ストックに求められる役割や使われ方の見直しといった新たな地域課題をもたらします。そのため、こうした地域ごとの変化を見据え、長期的な視点から都市空間の在り方を捉えていくことが求められます。

くわえて、これからの東京が成熟都市として、地域の持続可能性と暮らしの質を高めていくためには、利便性の向上にとどまらず、芸術、文化、産業、商業の集積など、それぞれの地域が持つ多様な特性を最大限に活用し、個性ある拠点を育んでいくことが重要です。あわせて、拠点や地域を公共交通や緑と水のネットワークなどでつなぎ、それぞれが相互に刺激し合うことで、広がりのあるにぎわいや相乗効果を生み出していく視点も不可欠です。

このため、集約型の地域構造への再編を一層加速させるとともに、個性ある拠点を軸でつなぎ、にぎわいと魅力にあふれる持続可能な地域構造へと深化させていきます。

2）地域的な都市構造の構成要素

① 地域レベルの拠点等

主要な駅周辺のほか、行政施設、商店街、団地、戸建て住宅団地、モビリティハブなどの身近な中心地を、地域レベルの拠点等に位置付けます。

拠点等においては、商業、医療・福祉、教育・文化、行政サービスなど、地域の実情に応じた都市機能の再編・集約を図り、機能的で利便性に優れた拠点を形成していきます。

あわせて、芸術、スポーツ、農など新たな視点も付加しつつ、それぞれの地域が持つ資源や個性を生かしたまちづくりを進め、人々が訪れ、様々な交流が行われ、地域への愛着が生まれる個性ある拠点を育んでいきます。

② 地域を支える都市基盤

拠点等の間をつなぎ、公共交通をはじめとする人・モノの移動や交流を支える道路・交通ネットワーク、まちに安らぎや潤いをもたらす緑と水のネットワークを、地域を支える都市基盤として位置付けます。

網の目のように張り巡らされた道路・鉄道などの既存インフラストックを最大限活用し、必要な機能更新・強化を図るとともに、自動運転などの新たな技術も取り入れながら、多様な交通手段を充実させることで、拠点間の結びつきを強めていきます。あわせて、河川・運河、公園・緑地、街路樹などを生かし、拠点や地域を結ぶ緑と水のつながりを創出していきます。

こうした都市基盤のつながりを生かし、広がりのあるにぎわいや相乗効果を生み出す軸の形成を進め、都市全体の価値を高めていきます。

③居住を誘導する区域

地域レベルでは、駅周辺等を核とし、その徒歩圏を基本に、地域の実情に応じた暮らしの場を「居住を誘導する区域」として捉えます。

拠点等への都市機能の再編・集約を進める中で、この区域では、日々の移動が確保されるとともに、食料品や日用品の買物をはじめ、日常生活に必要な機能が身近に揃う生活圏としての充実を図っていきます。

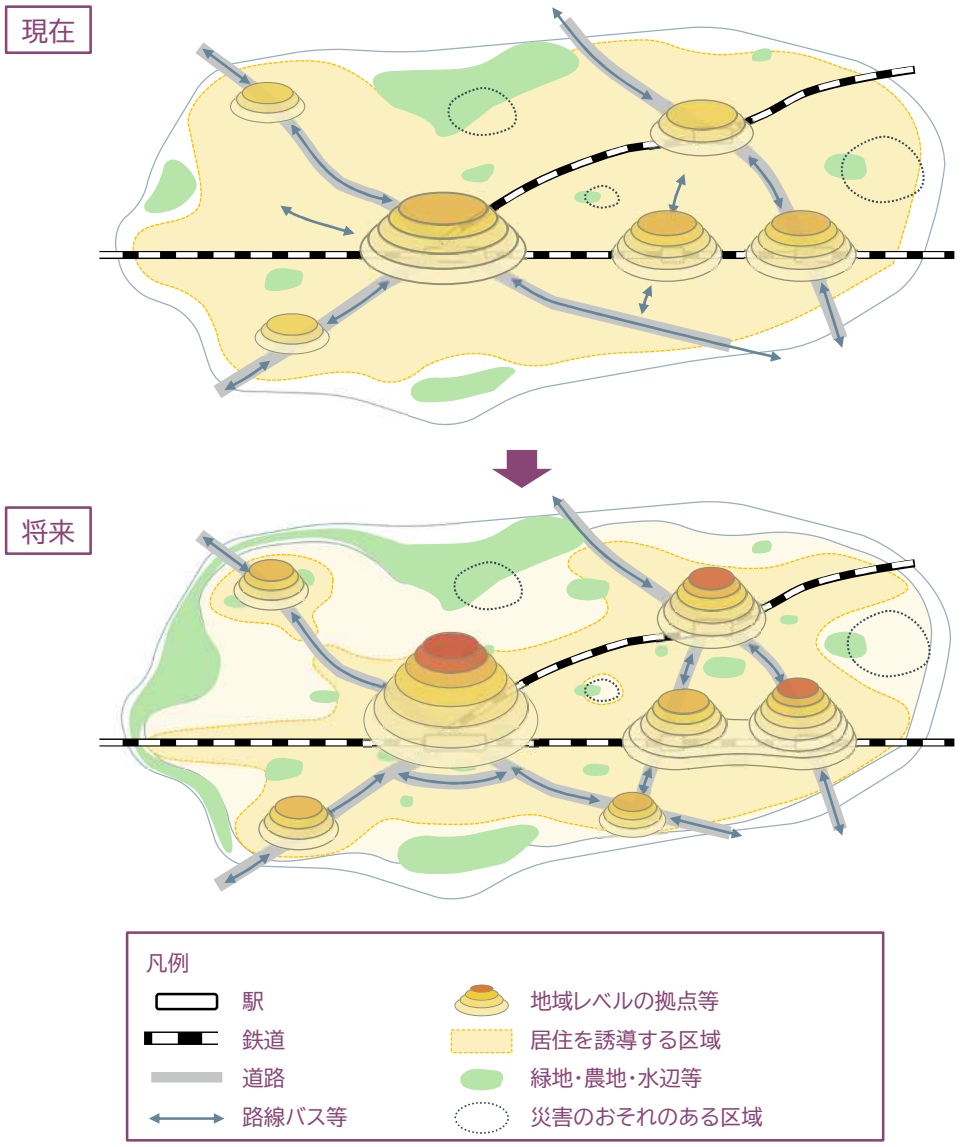
また、多様な暮らし方や働き方の広がりを踏まえ、住まいと働く場が近接・共存できるよう、コワーキングスペースなどの施設の立地を促すとともに、空き家や空き地といった既存ストックについても、リノベーションや用途転換を通じて、暮らしを支える地域資源として活用していきます。

あわせて、道路空間の再編や身近な緑の充実、農のある風景の維持などにより、ゆとりと潤いのある屋外環境を実現していきます。こうして、あらゆる場所で緑陰がもたらす涼しさを感じられ、居心地が良く歩きたくなる環境を広げることで、子供から高齢者まで誰もが安心して歩き、滞在できる空間を生み出し、人々の外出や交流を促していきます。

さらに、将来の人口動態や社会構造の変化、災害のリスクを長期的な視点で捉えながら、生活圏の再編を柔軟に進めていきます。その過程では、地域の実情に応じ、新たな宅地化を抑制するとともに、自然的な土地利用への転換も合わせて図っていきます。

こうして、誰もが自分らしく心豊かに暮らせる、持続可能な身近な生活圏を形成していきます。

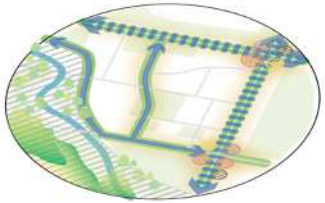
集約型の地域構造のイメージ



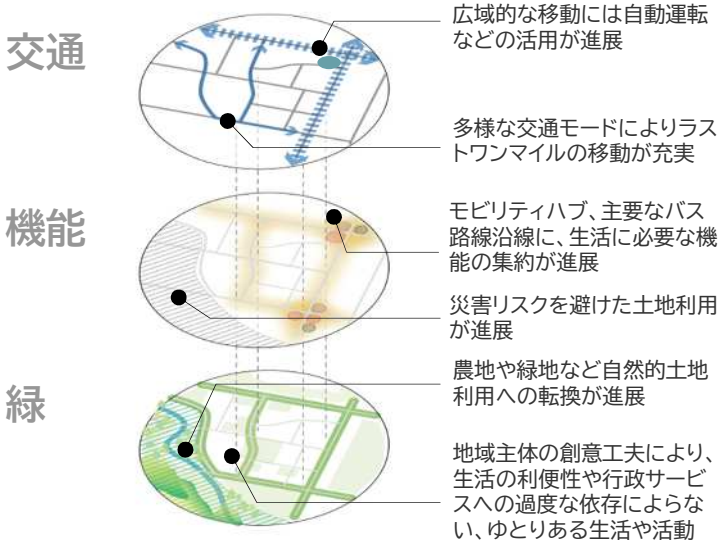
地域ごとの特性に応じて、交通・機能・土地利用のあるべき姿を導き、多様な都市活動や交流を支える新たな技術も活用しながら、持続可能で質の高い生活圏を形成していきます。

集約型の地域構造を支える移動と空間のイメージ

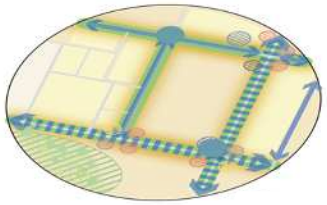
車中心の生活が行われている地域
将来、人口の大幅な減少や人口密度の低下が見込まれる地域　など



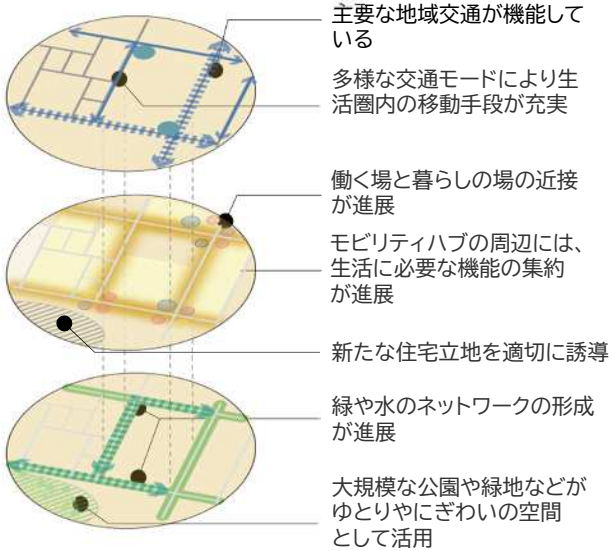
生活機能を集約し、余剰空間は自然的土地利用への再編を図る



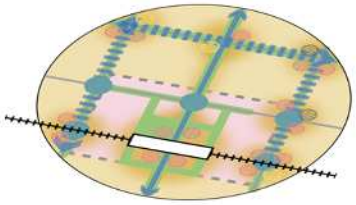
バスが日常の足となっている地域
将来、人口が減少するが一定の人口密度が確保される地域　など



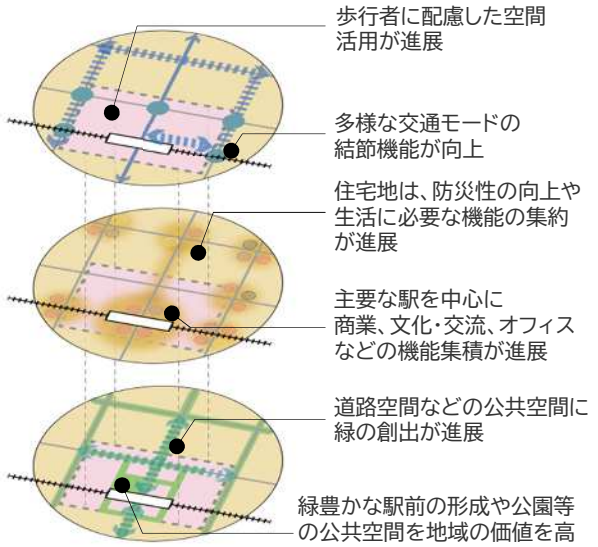
拠点・交通結節点から徒歩圏内に生活機能の集約を図る



鉄道が充実している地域
将来、人口の減少がそれほど大きくない地域　など



駅・拠点を中心に機能の集約、個性や魅力向上を図る



凡例
- 生活利便
- 働く場
- 医療福祉
- 教育・文化
- 行政サービス
- モビリティハブ
- 歩行者優先
- 基幹交通軸
- 生活圏を支える軸
- 道路再編

（4）拠点の形成

それぞれの地域が持つ個性やポテンシャルを最大限に発揮するため、以下の拠点等を位置付け、地域特性に応じた都市機能の集積を進めていきます。なお、拠点等については、都市づくりの進展状況に応じて適宜見直し、育成していきます。

1）中核的な拠点

道路・鉄道ネットワークの高い結節性を持ち、広域的な観点から、高度な都市機能が集積する地区を「中核的な拠点」として位置付けます。

区部中心部や羽田空港周辺においては、高次の中枢管理機能を核に、国際ビジネス、業務・商業、芸術・文化、観光、居住など、多様な機能が地域特性に応じて集まり、世界都市としての魅力を磨きながら、日本の経済成長と国際競争力を牽引します。

多摩地域においては、大学、企業、研究機関などと連携した業務・商業・産業の集積拠点となるとともに、豊かな自然環境や職住近接といった多摩ならではの魅力を生かし、多様なライフスタイルを支えます。

中核的な拠点では、民間の力を最大限に引き出し、土地の高度利用や既存ストックの活用を進めることで、産業・経済から芸術・文化、観光、暮らしに至るまで、多様な分野におけるイノベーションを創出し、国際的な活力の向上を促進します。

2）活力とにぎわいの拠点

地域の活気とにぎわいを生み出す都市機能の集積状況を踏まえ、鉄道乗車人員の特に多い駅周辺等を「活力とにぎわいの拠点」として位置付けます。

ここでは、それぞれの個性を生かしながら、商業、文化、交流をはじめとする様々な都市活動が展開し、拠点間の連携を通じて、連続的なにぎわいを生み出します。

3）地域の拠点

商業、医療、高齢者福祉、子育て支援施設など、生活に必要な都市機能の集積状況を踏まえ、鉄道乗車人員の多い駅周辺等を「地域の拠点」として位置付けます。

地域の拠点では、柔軟な働き方や暮らし方にも対応する都市機能の集積を進めるとともに、地域の個性やポテンシャルを引き出しながら地域の魅力やにぎわいの向上を図っていきます。

4）生活の中心地

「地域の拠点」以外の駅周辺、商店街、大規模な団地など、人々の活動や交流の場を「生活の中心地」と位置付けます。

生活の中心地では、飲食店や診療所など、生活に必要な都市機能の立地を促進することで、地域コミュニティや身近な生活を支える核として育成していきます。

03 広域的な4つの地域区分

東京には、国際的なビジネスの拠点から、歴史や文化が息づくまち、潤いのある水辺空間、緑豊かな住宅地、魅力のある商店街、風情のある下町、高い技術力を持った町工場が集まる地域まで、多彩な個性が面的に広がっています。

こうした地域それぞれの特色を生かすとともに、人を中心としたまちづくりや地域間の交流・連携を深め、それぞれの可能性を引き出していくことが必要です。そのため、地域区分を設定し、各地域区分の将来像と、そこで暮らし・働き・訪れる人々の活動イメージを描きます。

なお、各地域区分における将来像や人々の活動イメージは固定化されるものではなく、社会の変化や多様な価値観、ライフスタイル及びライフステージに対応して変容し得るものです。

(1) 4つの地域区分と2つのゾーンの考え方

1) 個性ある4つの地域区分

都内を、これまで培ってきた都市機能の集積や地域特性、インフラの整備状況、広域的な都市構造における位置付けを踏まえ、「中枢広域拠点域」、「新都市生活創造域」、「多摩広域拠点域」及び「自然環境共生域」の4つの地域に区分します。

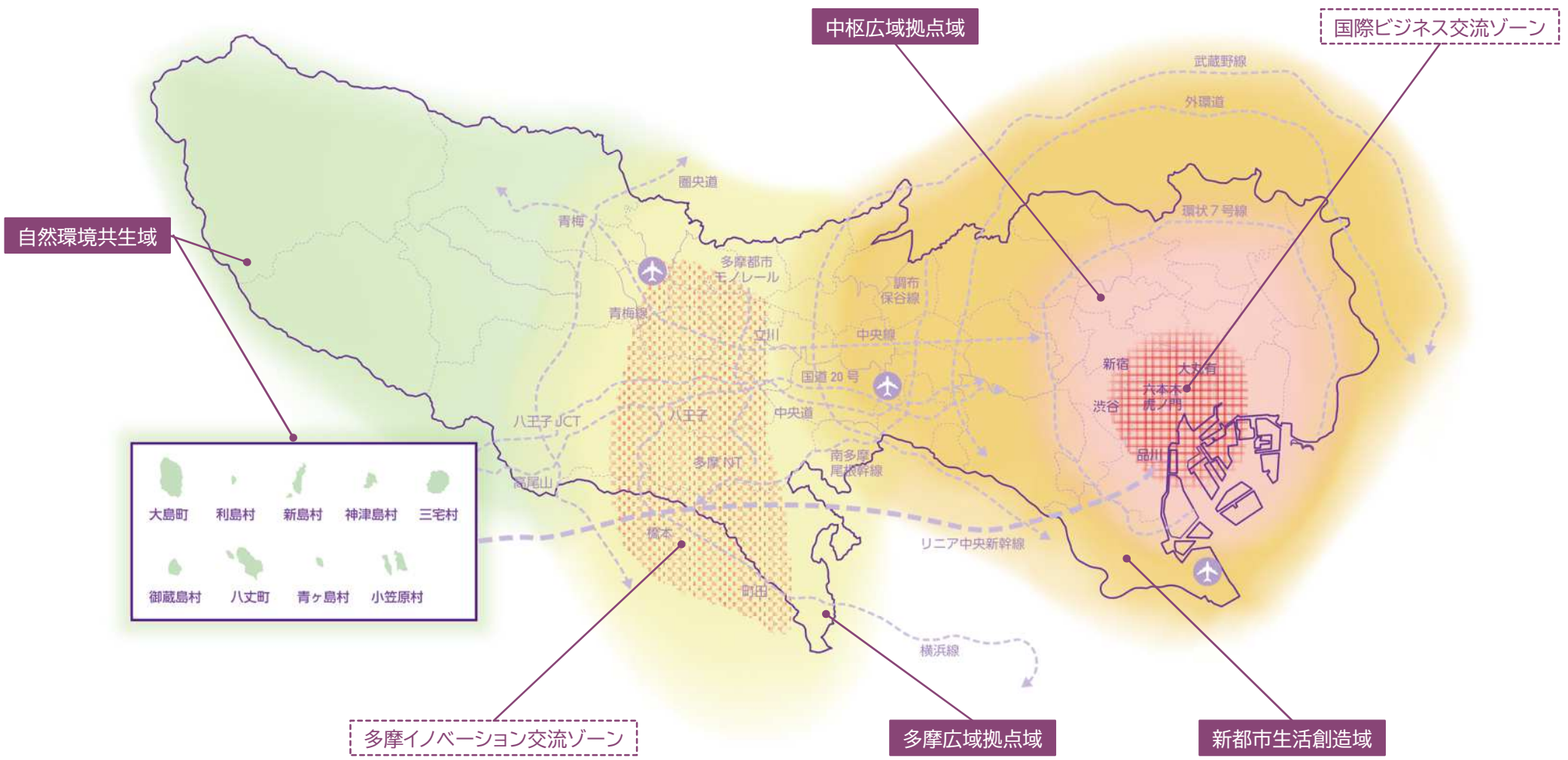
各地域区分のおおむねの範囲は、次のとおりです。

地域区分	おおむねの範囲
中枢広域拠点域	環状7号線の内側(臨海部を含む)
新都市生活創造域	環状7号線から、西側はJR武蔵野線まで、東側は都県境まで
多摩広域拠点域	JR武蔵野線から圏央道まで
自然環境共生域	圏央道の外側及び島しょ部

2) 日本と東京のエンジンとなる2つのゾーン

4つの地域区分のうち、「中枢広域拠点域」及び「多摩広域拠点域」は、「グレーター東京圏」における広域拠点に相当し、国内はもとより海外ともつながる交通の要衝に位置しています。この2つの拠点域に、多様で高次な都市機能の集積を生かし、相互に連携しながら日本と東京の活力を牽引するエンジンとなるゾーンとして、「国際ビジネス交流ゾーン」及び「多摩イノベーション交流ゾーン」を設定します。

4つの地域区分と2つのゾーン



※ 隣り合う地域区分の境界域は、相互の地域特性が緩やかに変化・融合しながら連続性を持っています。
※ ゾーンの範囲は、高度な都市機能の集積や競争力のある研究開発機能の集積など、既存のストックを効果的に活用するとともに、社会経済情勢の変化等に対応しながら変容し得るものです。

（2）4つの地域区分

1）中枢広域拠点域

おおむね環状7号線内側の区域では、高密な道路・交通ネットワークを生かして、国際的なビジネス・交流機能や、業務・商業・文化・居住などの複合機能を有する中核的な拠点が形成され、国内外の人、モノ、情報のグローバルな交流を通じて、新たな価値を生み続けています。

また、芸術・文化、スポーツなどの多様な特色を有する拠点が形成されるとともに、歴史的資源、風情のある街並みなど地域に蓄積されてきた都市ストックが保全・活用されています。それぞれの拠点や個性ある界わいが相互に連携し、多様な都市活動を生み出すことで、東京の魅力と活力を相乗的に高めています。

域内では、老朽建築物の更新や既存ストックの機能更新・有効活用、木造住宅密集地域等の改善が進むとともに、緑や水辺空間の保全・創出が図られています。中心部では高密度の、縁辺部では中密度の、緑豊かで潤いのある複合市街地が広がり、充実した鉄道ネットワークに支えられた多様な住まい方、働き方、交流などを受け止める都市空間が形成されています。

＜暮らし・活動のイメージ＞

- 国内外から集まるビジネスパーソンや働く人々が、場所にとらわれずに商談や協働を行い、新たなビジネスや交流を生み出しています。
- この地域で暮らし、働き、学ぶ人々や国内外から訪れる人々が、歴史や文化を感じられる界わいを巡り、芸術、スポーツ、食などを楽しんでいます。
- 緑や水辺にあふれた環境の近くでは、商店街などの下町文化を感じながら、滞在できる身近な空間で、年齢や国籍を越えた人々の交流が生まれています。

【臨海部】

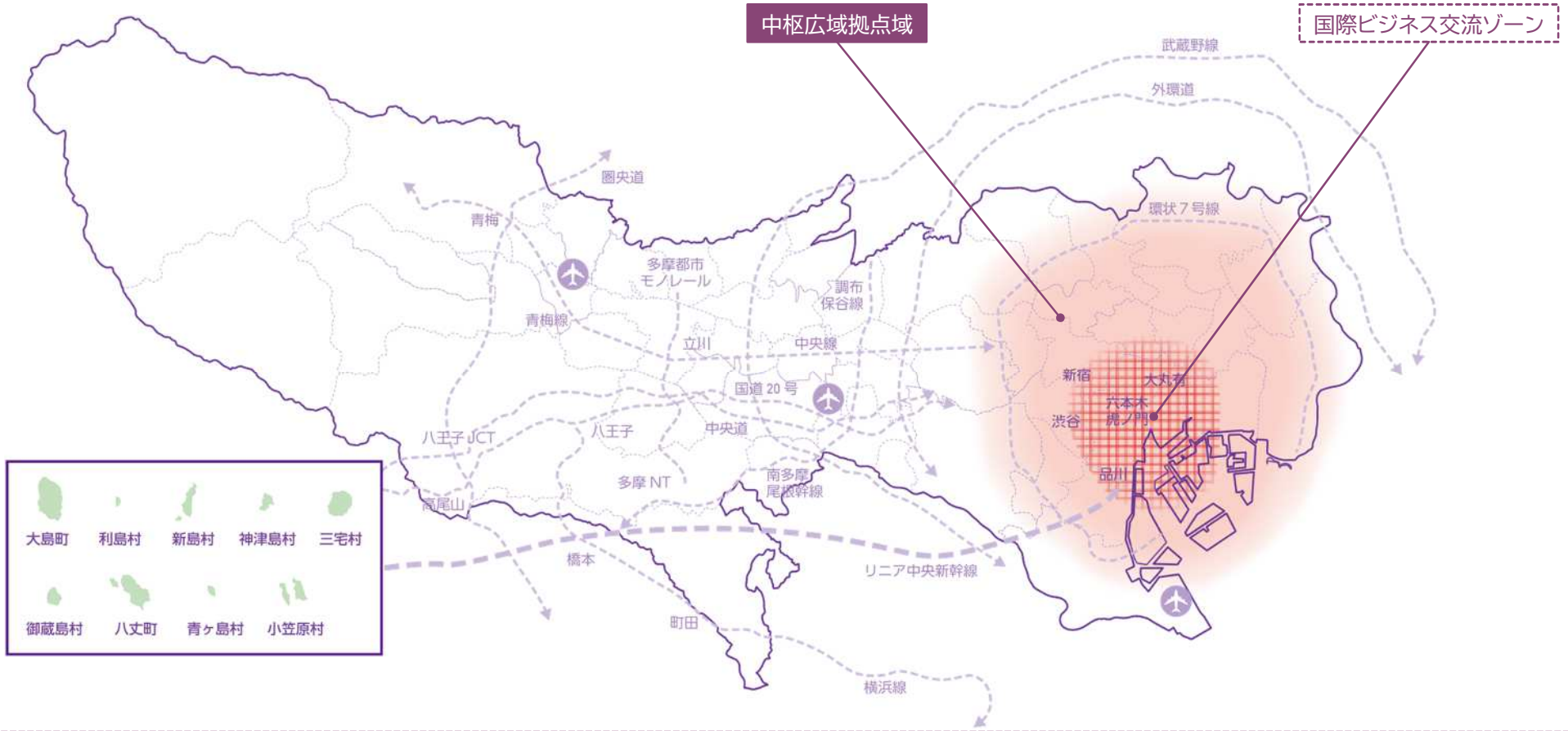
臨海部は、都市鉄道である都心部・臨海地域地下鉄、BRT、舟運など多層的な交通ネットワークの充実により区部中心部と強く結ばれ、一体的な地域として発展しています。区部中心部の公園から臨海部の緑や水へとつながり、水辺の潤いに包まれたウォーカブルな空間や、東京2020大会のレガシーを生かしてスポーツを身近に楽しめる環境が広がっています。

また、自動運転、次世代エアモビリティなどの先端技術がまちに実装されるとともに、スタートアップ企業等が集積し、イノベーションを生み出すエコシステムが育まれ、ビジネスや交流、夜間のにぎわいに新たな価値を生み出しています。

さらに、グリーン水素エネルギーや浮体式太陽光発電の活用など、臨海部の特性を生かしたゼロエミッション技術が先行的に実装され、水辺環境やエネルギー循環の質を高めながら、都市と自然が共生する循環・再生型のベイエリアが形成されています。

＜暮らし・活動のイメージ＞

- 多くの人が快適な居住環境で暮らし、地下鉄、BRT、舟運など高密度な交通手段により、都心と臨海部を快適に行き来しています。
- 研究者が昼は良質な環境で研究に没頭するとともに、水辺のウォーカブルな空間を歩き、憩い、スポーツを楽しむことで、クリエイティブな発想に磨きをかけています。
- 日常的に自動運転や次世代エアモビリティなどの先端技術を利用し、昼間の活動にとどまらず、夜においても魅力的な景観やにぎわいを楽しんでいます。



国際ビジネス交流ゾーン

中枢広域拠点域のうち、特に、国際金融やライフサイエンスといったグローバルビジネスの業務統括拠点やアジアのヘッドクォーターなど、国際的な中枢業務機能が高度に集積した中核的な拠点が複数形成されています。

高密な道路・交通ネットワークを生かして、これらの拠点の機能が相互に連携するとともに、世界中から人材、資本、情報が集まる環境が整っています。ビジネスマッチングなどを通じて新たなビジネスや交流が展開され、国際的なビジネス・交流拠点としての機能が持続的に更新・拡張されています。

また、グローバルなビジネス展開を支える外国人向け住宅、サービスアパートメント、医療・教育機関など、国際的に高い水準を持つ緑豊かな都市環境が整備され、世界各国から集まる多様な人材とその家族が、安心・快適に暮らせる環境が形成されています。

＜暮らし・活動のイメージ＞

- 世界中から集まる企業や人材がビジネスマッチングを通じて交流し、新たなビジネスを生み出しています。
- AIエージェントを備えたオフィスから、各国のビジネスハブとオンラインで協働しています。
- 世界各国から集まった多様な人材とその家族が、地域と共生しながら、国際水準の住宅、医療、教育環境の中で安心・快適に暮らしています。

2）新都市生活創造域

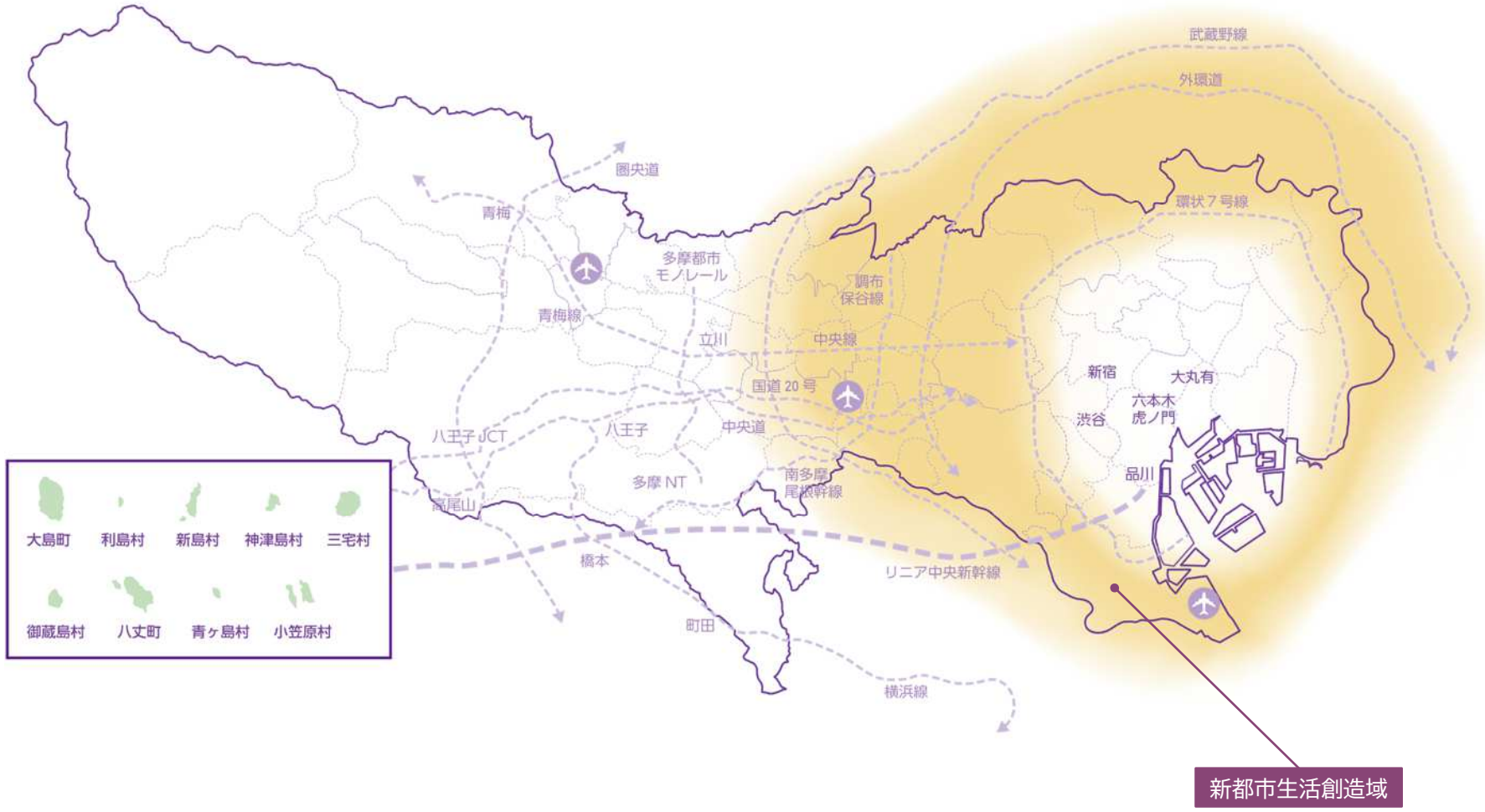
おおむね環状7号線から、西側はJR武蔵野線まで、東側は都県境までの区域では、駅や身近な中心地に、商業、医療・福祉、子育て、教育、文化、交流など、日常生活を支える複合的な機能が集積し、公共交通で結ばれた利便性の高い生活圏が形成されています。

木造住宅密集地域の改善や大規模団地の更新を進めるとともに、空き家、高経年住宅、商店街、銭湯などの既存ストックが、住まい、働く場、交流の場などの複合用途に活用されています。良質で機能的な住環境を基本としながら、芸術・文化、教育、産業、商業等の機能が複合的に利用されることで、多様なライフスタイルを支え、新たな価値を生み出す個性ある市街地が形成されています。

また、環状・放射方向の公共交通の充実により区域内外の移動の利便性が高まり、多様な世代の生活と社会参加が支えられています。農地、樹林地、水辺等が保全・活用され、農空間、公園などが、子育てや健康づくり、地域交流を支える身近な緑の空間となっています。

＜暮らし・活動のイメージ＞

- 木造住宅密集地域の改善により安全になった地域の広場や公園などで、子供たちがのびのびと遊んでいます。
- 高齢者が、身近な駅や商店街で買物、通院などの日常の用事を済ませ、顔なじみの人、地域を訪れる人など多様な世代の人々との交流を楽しんでいます。
- 職住近接や柔軟な働き方によって生まれた時間を、子育てや地域活動、趣味、家族との団らんに充てています。
- 若い世代をはじめ多様な人々が、空き家や高経年住宅を自分らしい住まいや仕事場、交流の場として改修・活用し、地域に新たな文化や活動を生み出しています。


武蔵野線
外環道
圏央道
青梅
環状７号線
多摩都市
モノレール
調布
保谷線
青梅線
立川
中央線
新宿
大丸有
国道 20 号
六本木
虎ノ門
渋谷
八王子 JCT
八王子
中央道
品川
多摩 NT
南多摩
尾根幹線
高尾山
橋本
リニア中央新幹線
町田
横浜線
大島町
利島村
新島村
神津島村
三宅村
御蔵島村
八丈町
青ヶ島村
小笠原村
新都市生活創造域

3）多摩広域拠点域

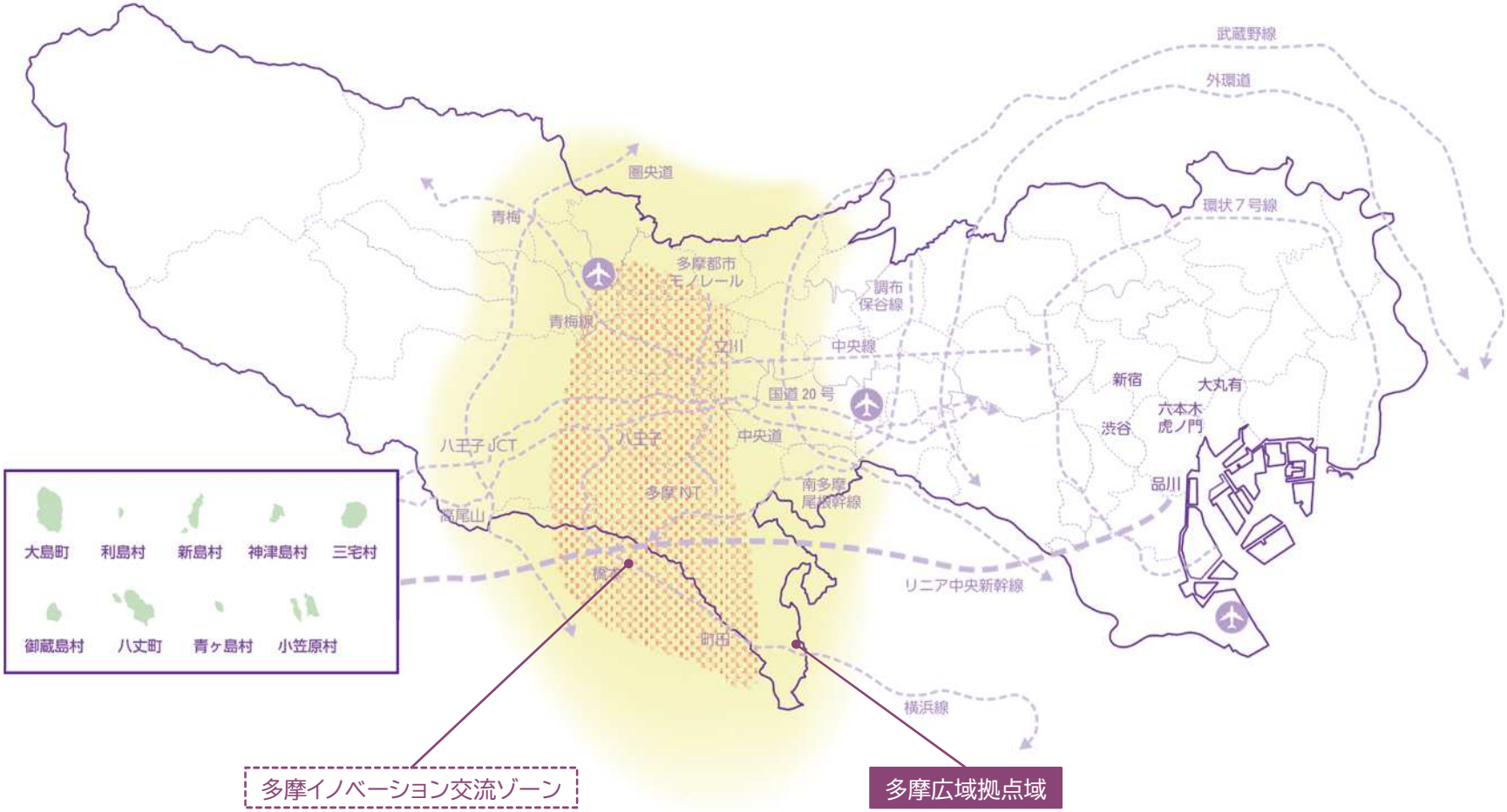
おおむねJR武蔵野線から圏央道までの区域では、道路・交通ネットワークの結節点に、業務・商業・交流等の複合機能を有する拠点が形成され、リニア中央新幹線、圏央道、多摩都市モノレール等を生かして、他の広域拠点や都市圏との交流が活発に行われています。

また、大学、企業、研究機関、ものづくり産業等の集積を生かした研究・学術・産業の拠点形成が進んでいます。駅等を中心とした拠点では、物販、飲食等の日常的な生活サービスに加え、医療・福祉・介護、子育て、コミュニティ等の多様な機能が集積しています。公共交通と一体となった歩き、たたずめる広場空間が形成され、東西・南北方向の道路・交通ネットワークによって、拠点間の連携が強化されています。

拠点周辺の市街地では、大規模団地、住宅ストック、空き家等の更新・活用が進み、誰もが安心して快適に暮らせる住環境と、働く場や人々が集う場が近接する生活圏が形成されています。また、丘陵地や農地等の緑が保全・活用され、暮らしの中で自然と触れ合える環境が広がっています。

＜暮らし・活動のイメージ＞

- 単身で暮らす高齢者が、駅周辺で買物、通院などの日常の用事をまとめて済ませ、趣味仲間や地域の人との交流を楽しんでいます。
- 子育て世帯が、丘陵地や農地の緑を身近に感じながら、自宅や地域の身近な働く場で柔軟に仕事をし、子育てや家族との時間を大切にしています。
- 学生や働く人が、充実した交通ネットワークを利用して都心や他都市圏と行き来し、多様な仕事や学び、交流に参加しています。
- 外国人技術者、留学生などが、空き家や団地を活用した交流施設で、地域の人々と多様な交流を図り、地域の担い手としても活躍しています。



多摩イノベーション交流ゾーン

多摩広域拠点域のうち、特に、企業、大学・研究機関などが集積する地域では、研究・学術・ものづくりの拠点が形成され、国内外から若い世代をはじめ、多様な人材を惹きつけています。リニア中央新幹線、圏央道、多摩都市モノレールなどの道路・交通ネットワークを生かして、域内外との交流が活発に行われています。

企業、大学・研究機関などの連携の下、研究開発から製品化までを支えるプラットフォームや、多様な主体が交流し、挑戦できる環境が整い、新たなアイデアや創意工夫、多様なイノベーションが生み出されています。

また、先進技術を活用した農業が展開され、広域道路ネットワークを通じて農産物が広く届けられるなど、先進技術と多摩の豊かな自然が融合した特色ある産業が形成されています。

＜暮らし・活動のイメージ＞

- 国内外から集まる若い研究者や学生が、緑に囲まれたラボや交流の場で、組織や分野を越えて語り合い、新たなアイデアや事業に挑戦しています。
- 技術者や起業を目指す人が、大学や研究機関と連携し、研究成果を新たな製品やサービスへ発展させています。
- AI管理の屋内農場などで先進技術を活用し、多摩の自然と技術を生かした新たな産業を生み出しています。

4）自然環境共生域

おおむね圏央道の外側及び島しょ部の区域では、清流、森林、美しい海などの豊かな自然環境と、温泉、地酒などの地域資源が保全・活用されています。こうした自然環境や地域資源を基盤として、サテライトオフィス、環境教育、スポーツ、観光などの多様な機能が共存し、新たな余暇や交流のスタイルが生まれています。

また、生活の中心地を核とし、地域の実情に応じた公共交通や新たなモビリティの活用、医療や生活を支えるサービスへの先端技術の活用により、安全・安心な暮らしが確保されています。あわせて、地域に眠る空き家も活用しながら、ワーケーション、二地域居住など、多様な暮らし方や働き方を受け入れる環境が形成されています。

多摩地域では、貴重な自然環境や希少な生態系が保全され、豊かな自然をはじめとする多様な地域資源が、観光や農業・林業を体験する場として活用されています。こうした森林や河川などは、下流の市街地を水害から守る役割も果たしており、大切に引き継がれています。

島しょ部では、かけがえのない自然や希少な生態系とともに、島固有の文化、伝統、地場産業等が守り継がれ、自然、観光、交流、仕事が調和する地域が形成されています。太陽光や風力、地熱など、島しょ部のポテンシャルを生かしたゼロエミッションアイランドが実現しています。

＜暮らし・活動のイメージ＞

- 地域で暮らす人々が、ドローン配送、遠隔診療なども利用しながら、豊かな自然の中で安全・安心に暮らし、自分に合った働き方を選択しています。
- 都市部などから訪れた人が、サテライトオフィスや空き家を活用し、ワーケーション、二地域居住などを通じ、地域と継続的につながりながら働いています。
- 国内外から訪れるツーリストが、アドベンチャーツーリズムやサイクリング、トレッキング、島々を巡る旅を通じて、雄大な自然や希少な生態系を体感しています。
- 地域の人と来訪者が、農林業や森林保全に共に取り組み、工芸品の製法を学ぶなど、地域固有の自然・文化・伝統を次世代へ引き継いでいます。

自然環境共生域
大島町
利島村
新島村
神津島村
三宅村
御蔵島村
八丈町
青ヶ島村
小笠原村
武蔵野線
外環道
圏央道
青梅
環状７号線
多摩都市
モノレール
調布
保谷線
青梅線
立川
中央線
国道 20 号
新宿
大丸有
六本木
虎ノ門
渋谷
八王子 JCT
八王子
中央道
品川
多摩 NT
南多摩
尾根幹線
高尾山
橋本
リニア中央新幹線
町田
横浜線